

光源氏、深夜の後宮に侵入して朧月夜を（源氏物語・花宴）

上達部達との花見の宴会で光源氏はすぐれた漢詩と舞を披露した。皆帰ったあと、源氏はひとりで宮中を徘徊している。また、源氏は藤壺の女御を恋慕している。なお「藤壺」「弘徽殿」は内裏清凉殿の奥にある後宮であり関連の女性達の生活の場である。

月いと明うさし出でてをかしきを、源氏の君、酔ひ心地に見過ぐしがたくおぼえ給ひければ、「上の人びともうち休みて、かやうに思ひかけぬほどに、もしさりぬべき隙もやある」と、藤壺わたりをわりなう忍びてうかがひありけど、語らふべき戸口も鎖してければ、うち嘆きて、なほあらじに、弘徽殿の細殿に立ち寄り給へれば、三の口開きたり。女御は上の御局にやがて参う上り給ひにければ、人少なるけはひなり。奥の枢戸も開きて、人音もせず。「かやうにて、世の中のあやまちはするぞかし」と思ひて、やをら上りて覗き給ふ。人は皆寝たるべし。いと若うをかしげなる声の、なべての人とは聞こえぬ、「朧月夜に似るものぞなき」とうち誦じて、こなたさまには来るものか。いとうれしくて、ふと袖をとらへ給ふ。女、恐ろしと思へるけしきにて、「あな、むくつけ。こは、誰ぞ」とのたまへど、「何か、疎ましき」とて、⁸ 深き夜のあはれを知るも入る月のおぼろけならぬ契りとぞ思ふ

1 傍線は読解に役立つ重要単語。数字は読解のヒント
2 このセリフは誰のものが。また、独白か発言か。
3 例えば「かやう」を指示語と考えると意味が分からなくなる。まず会話独白の意味を大づかみにつかもう。
4 「わりなし」にふくまれる意味は
5 弘徽殿の女御は宴会後そのまま女房たちを引き連れて天皇の局に出かけてしまっているようなので人が少ない
6 源氏は何を言っているのか。あやまちはお前だと突っ込み、7 最初のこのやりとりを訳せ。
8 この歌の意図は何か。また「おぼろげならぬ契り」とは月の明るさと彼女が歌っていた歌を引いているのだが、ここではどういう契りか。

とて、やをら抱き下ろして戸は押し立てつ。あさましきにあぎれたるさま、いとなつかしうをかしげなり。わななくわななく、「ここに、人」とのたまへど、「まろは皆人に許されたれば、召し寄せたりとも、¹⁰ なんてふことかあらむ。ただ、忍びてこそ」とのたまふ声に、¹¹ この君なりけりと聞き定めていささか慰めけり。わびしと思へるものから、情けなくこはごはしうは見えじ、と思へり。¹² 酔ひ心地や例ならざりけむ、許さむことは口惜しきに、女も若うたをやぎて、強き心も知らぬなるべし。

¹³ らうたしと見給ふに、ほどなく明けゆけば、心あわたたし。女はましてさまざまに思ひ乱れたるけしきなり。「なほ名のりし給へ。いかでか聞こゆべき。かうてやみなむとは、さりともし思されじ」とのたまへば、¹⁴ 憂き身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば問はじと思ふ

と言ふさま艶になまめきたり。「ことわりや。聞こえ違へたる文字かな」とて、
「いづれぞと露のやどりを分かむまに小笹が原に風もこそ吹け
わづらはしく思すことならずは、何かつつまむ。もし、すかい給ふか」とも言ひあへず、人々起き騒ぎ上の御局に参りちがふけしきどもしげくまよへば、いとわりなくて、扇ばかりをしるしに取り換へて出で給ひぬ。

9 内容から当然主語が変わっている。この場面で「なつかしうをかしげ」とは変なようだが、源氏物語によくある、誰の視点ともいえるものなのか。または源氏の視点なのか
10 誰の発言か、また何を言っているのか
11 「君なりけり」とはどういうことか。
12 関係をもったことが状況として示される
13 二人の関係はどうなったのか。
14 「聞こゆ」は聞こえるとか申し上げるとか習っていると思すが、ここではどう訳したらいいか。